



皇居前美観論争



東京海上日動ビル本館(東京都千代田区)
その左下の白っぽいビルが同じ解体予定の新館

はじめに

令和4年(2022)10月に解体予定(8月時点)の東京海上日動ビル本館(以下、海上ビル)は、前川國男氏の設計で東京丸の内の御堀端に立地しており、皇居と向き合っています。昭和41年(1966)に32階建て高さ約130mの超高層ビルとして建設されるべく、建築確認申請が東京都へ提出されました。もし、すぐに着工していれば、昭和43年(1968)竣工の霞が関ビルに先んじて、日本初の超高層ビルとなっていたかもしれません。

しかし、なぜか東京都は申請を受理せず、建設の是非について当時の首相、建築関連団体、右翼、海外メディアまでも巻き込む大論争となりました。

この騒動は、皇居周辺が美観地区に指定されていたことから、「皇居前美観論争」と呼ばれました。その一方で、4年以上もの大論争に発展した原因について「皇居を見下ろすような超高層ビルは、不敬だから」という噂が飛び交うことになりました。しかし、本当の原因は美観でも、不敬でもなかったのです。

発端

昭和31年(1956)にGHQの接収を解除された当時の海上ビルは、震災と戦争を経て、建て替えの必要に迫られました。

そのような折、昭和38年(1963)に建築基準法が改正されて容積地区制となり、高さ31mの高度制限が撤廃され、特に丸の内周辺は容積率が1000%という超高層ビル建設に最適の地区となりました。これを受けて東京海上では、本社を超高層ビルに建て替える方針を固めます。

ところが、ここで不測の事態が起きました。東京海上の当時の担当者の一

出てきている。…まあ一部から天皇様の近くにそういうものを建てるのはけしからんというものもあるし…これはよく考えてそうしてその美観をやはり存置するようにしなければならん」などと、反対理由が二転三転する有様でした。



佐藤栄作元首相(写真提供:共同通信)

25階100m

こうした一方で、昭和天皇は「高いビルが建っても迷惑ではない」と発表されたため、国内はもちろん海外メディアまでも「ヒロヒト承認」などと揶揄するような始末となりました。

建築界からも諸団体が建設を許可すべしと声明を出したにもかかわらず、まったく無視される結果となり事態は混乱を極めたのです。

ところが泥沼化した論争は、突然の解決を見ることがとなりました。建設省(現国土交通省)が提示した25階100mへの設計変更案を東京海上が受け入れ、4年以上もの論争は幕を閉じたのでした。

しかし、どうして25階100mなのでしょう。当初の設計案から30m削った意味は何だったのか。実は、その真相が先に紹介した今里氏の著書に書かれているのです。

だったとみられる平尾正氏(元・東京海上施設調査室次長)によれば、設計の協力を委嘱しようとした三菱地所が、「九階建て揃っている丸の内一帯の三菱地所ビル群との釣り合いをこわす」という理由で設計を拒否したと言っています。

今里廣記氏の手記

日本精工株式会社元社長だった今里廣記氏は、著書『私の財界交友録』に美観論争の顛末を記しており、それによれば平尾氏の言い分とは若干異なり、東京海上は初めから前川國男氏に設計を任せ方針だったといっています。

ちなみに今里氏は、当時の財界のまとめ役で政界にも通じており、後述しますがこの論争の調停を頼まれることになるのです。

その今里氏によれば、当時東京海上の会長だった水沢謙三氏が、東大建築科の同窓生だった前川氏に設計を頼み、同グループの三菱地所を無視したことが「東京海上の新社ビル建築計画に長い間、待ったをかけることにつながったのである」と断言しています。

今里氏の調停

今里氏は当時の自民党内の実力者だった川島正次郎氏から調停を頼まれ、佐藤首相に直談判しました。以下は著書からの引用です。

「私は酒の席ながら、直截に用件をぶつけていった。そうすると、総理は「天皇陛下のお住まいをのぞくわけにいかないからね」と従来の答えがそのまま、はね返ってきた。

「じゃあ、ひと足先にできているホテルニューオータニはどうですか。あそこからも、皇居はよく望めますよ」

負けずに、私も反論していった。完成して間もないホテルニューオータニは、地上十七階、高さ70メートルと当時としては威容を誇っていた。

「オータニは今里君、裏口じゃないか。丸の内の東京海上とは違うからね」

何と、ホテルニューオータニは皇居から見、裏口だからという論法である。私はふきだしたくなかったが、そこはじつと我慢して、「総理、お言葉を返すようですが、どっちが正面で裏口かは決まっています。でもないとはいえませんが」とやり返したが佐藤首相は慥然としたままであった。――

足して二で割る

この後も説得は難航しますが、ある日、川島氏から妙案を思いついたと連絡が入ります。

「さっそく川島私案を見せてもらおうと、「東京海上ビルを二十五階にする」という内容であった。当初の計画は三十二階である。それがなぜ二十五階に階数を減らし、またそうすれば、なぜ佐藤首相

三菱地所は、丸の内の大地的存在でした。当初から設計を委嘱したくないに聞わず、その意向を無視したことが確執につながったことは間違いないようです。

東京都の反応

それから間もなく、なぜか東京都が丸の内一帯に高度制限をかける準備を始めました。東京海上は建築確認申請に踏み切ったものの、「都庁ではこの申請書を長い間保留して、一方で美観条例という古い法律を使って、その中の条項に高さ制限その他の項目を設けて、新しく都

を説得できるのか。結論からいうと、川島氏の案はかつて大野伴睦氏が本領を發揮した。足して二で割る。方式を踏襲したものであった。佐藤首相は、その後、私たちからの働きかけに動かされてか、「東京海上ビルもホテルニューオータニと同じ十七階にするのなら構わない」という意向を周囲にもらしていたのである。東京海上の三十二階、佐藤首相の十七階――これを足して二で割ると、二十五階になるじゃないか。これで双方とも円く収まる。――

おわりに

信じられないことに、まさに日本人的な、足して二で割る。論法で円く収まったのです。しかし、このような政治的な解決法は、禍根を残しました。昭和49年(1974)、東京海上ビルの竣工後、皇居の濠に面した部分のビルは約100m程度と都市計画的に何の根拠もない100mという数字が、不文律として機能するようになったのです。

平尾氏はこの論争を振り返り、怒りを隠すことなく次のように述べています。「まことに愚かな事件であった。あるいは総理へ抵抗した者への見せしめということだったのかもしれないが、そうだとすれば、これはまさに悪政を絵にかいたような馬鹿殿様の所業である」。(文：江口知秀)

謝辞

本稿の執筆では大澤昭彦氏(東洋大学理工学部建築学科准教授)のブログ「高さ制限とまちづくり」・「2 高層建築物の歴史 なぜ皇居濠端の高層ビルは100mになったのか?」が大要参考になりました。謹んでお礼申し上げます。